
天人散華

星水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天人散華

【Nコード】

N9274V

【作者名】

星水晶

【あらすじ】

戦のさなかに暴行をつけた敗戦国の娘。その後ひとりで子どもを産む。その娘のもとに、戦勝国の老婆が息子の身代わりに罪を償うために尋ねてくる。国家の思惑の外で傷つく個人と、それを乗り越えて絆を結ぶ人の強さの話。

この話のもととなっている戦争の物語は別な長編になる予定。この話はその挿話として習作したものです。設定となっている国家群は古代絲調之道をイメージしています。

初秋の日は早や西に傾いた。媼おんなが一人、その顔に西日を斜めに受けて歩いていった。このあたりはひと気もない荒れ野と化して、焼け残った木々がまばらに立ち枯れていた。うすら青草のいじましく生えかかった塚の脇には、赤錆びた銚の折れ先が頭を出していた。小高い丘にさしかかると、館の跡か、炭になった柱がまだ残っていた。ここいらも戦場となつたのである。媼は幾度となく頭をたれ、顔をそむけて足早に通り過ぎた。つまり足元を見るのも恐ろしい。木の根ならよし、もしまや白く光る人骨でもあつたなら。媼は見知らぬ土地を、ただひたすらに歩いて行つた。

媼はここよりはるか北の国の生まれだった。その国の名を玄象げんしょうと叫ぶ。玄象は山国。その国が戦をしかけた。媼は今旅しているこの青蓮華しょうれんげの国に。二年ほど前のことであつた。

道というほどのものどとなく、古い轍の跡をたどりつつここまで来たが、荒れ野を旅する心細さは日が傾くにつれいやました。古戦場で野宿をするのは恐ろしい。気の荒れた野の獣が徘徊するのも、またそれにもまして無念の思いでさまよい出る亡霊に出会うのも。

ふと顔をあげると、ゆくての左手に小さな鐘撞き堂のようなものが見えた。媼は杖を握りなおして、その堂を目指して歩きだした。近づいて改めて見れば、やはり鐘撞き堂である。土台の石垣の上に櫓が組まれ、青銅の小さな鐘がまだ下がっていた。堂に上つて腰をおろすと、媼はつましい荷物の中から瓢箪を取り出し、水を飲んだ。手布に水をたらして、土埃によごれた顔や手をふいた。次に糲と木の実をほんのわずか取り出した。今夜はここで明かすのかと覚悟した時、突然に声をかけられた。

「旅の方、じきに日暮れとなります。よろしければ拙宅へおいでになりませんか」

見慣れない衣を身につけた小柄な男であつた。男の指さす方を見

れば、なるほど堂の裏手に草庵があつた。媪は導かれるままについていった。

「何もありませんが、茶など進ぜましょう」

広くもない庵のまんなかに炉が切られてあつた。男は炉に火をおこすと、水をいれた土瓶をかけた。媪に藁座を勧めると、自分も向かいあつて腰をおろした。日中はまだ暖かいとはいえ、日が暮れると火が恋しい季節となつていた。土瓶がたぎると、男は椀を二つ取り出し、団茶の塊から小刀で大切に削りとつた茶の葉をひとかけ入れて湯を注いだ。庵中に茶の香りが満ちた。その椀のひとつを媪に手渡し、もうひとつの椀を手にとつて自分も飲んだ。媪も温かい椀を口に運んだ。かすかな苦みと甘味に、馥郁とした香気が体を満たした。二人はほつと息をついて、目をあわせるとほほえんだ。

「粥でよろしければ召し上がりませんか」

男は土瓶を鍋にかけかえながらたずねた。

「いえ、食べ物を持ちあわせておりますんで」

「どこまでおいでになるか知りませんが、まだまだ道は遠いでしよう。その食糧は取つておいでになるとよい」

男は水をはつた鍋に一握りの雑穀と山菜や茸をきざみ入れた。

「門にくみおきの水甕があります。粥の煮える間に、手などおすすぎなされては」

媪は庵を出ると、脚絆をはずして手足をすすいだ。故郷の山をおりてから、このようにくつろいだことは初めてだった。この男には不思議と人を惹きつける力があつた。媪がもどると粥はもう煮えていた。

ふたりは向き合つて静かに粥を食べた。

「たいそうご雑作をおかけしました」

媪が頭をさげると、男は手をふつて遮つた。

「なにほどのことでもないません。わたしとても旅の者です」

「この国の方ではあられませんので？」

媪が少し驚いた顔を見ると、男は静かに微笑んだ。

「あなたも、青蓮華の方ではありませんまい。わたしはここより南の迦毘羅国かひらの者。戦がおさまってからこのあたりに参りました。もうその時分から、このあたりには青蓮華人はひとりも見かけませぬよ」
「迦毘羅国とは、またはるか南、黛嶺たいれいのむこうの国と聞いております。われらはてつきり、物語の中の国とばかり思いこんでおります」

媪は男の勧めるままに藁筵わらじに横になつた。炭を埋めた炉辺は暖かかった。草葺きの屋根の隙間より、月の光がさしこんで、媪の顔を照らした。夜半の風がわたるのを聞きながら、媪はくらがりの中で目をあけていた。さらさらと聞きなれない葉ずれの音がした。静かに優しいその音はいつまでも鳴り止まず、媪はつい半身を起して耳を傾けた。埋もれ火の向こうに座っていた男が声をかけた。

「竹の音です。わたしの生国より持ってきて、この裏手に植えました。竹はこの国には根付かぬようで、あちこち植えましたが、ここだけしか残りませんでした」

「起こしてしまつてすみません」

媪が小さくなって謝った。

「眠れないご様子。夜語りでもいたしましょうか」

男は炉の火をかきたてた。

「青蓮華の戦の話聞いたとき、わたしは学問僧でした。ご存じかどうか、迦毘羅国では仏陀のみ教えが国教です。大伽藍寺の経堂にこもつて、経典を学ぶのが学問僧の本分でした」

男は苦笑をうかべた。

「その時分のわたしは、おこがましくも学問僧として名を成しかけておりました。同輩の中からぬきんでた者と評価され、ゆくゆくは僧正の位も夢ではない、と言われておりました。ですが、経典を学べば学ぶほど、迷いが出てまいったのです。もとより、粗衣粗食は仏徒のならい。だがそれはすべて修行であつて、本物の飢えや寒さではないのです」

男は手に取つた粗朶を折ると、炉の火にくべた。媪は静かに男の

語る声を聞いた。

「自分で植えもせぬ穀物を食べ、織りもせぬ衣をまとして、手を汚さず額に汗することもなく、いかに貴いみ教えとはいえ、ただ經典の文字の上でのみ学んだことを、真理として衆生に語り聞かせる。それこそ増上慢そくじょうまんとは言えますまいか。仏陀がその御身をもて悟り得たことを、經典の字句を左右して是非を論じる。そら恐ろしいとは思いませんか」

「われらには難しいことはわかりませんが、お苦しかったのでございますな」

男は何度もうなずいた。

「わたしはとうとう寺を出て修行者の群れに身を投じました。大伽藍寺の僧侶とはちがい、修行者は小乗を実践によって学ぶもの。現世を捨てることが悟りへの道。修行者にとつては僧綱に守られた大伽藍寺の僧侶の身分が、すでに現世でありました。襪むくろ褌ふんどしをまとい、はだしで、身を清めず、あれば食しなければ食べず。苦行を重ねて、捨てて、捨てて、捨て果てた末にその命までも土くれのごとく投げ捨ててしまう。でも、そのありようのどこに救いがあるのでしょうか。わたしは修行者にもなりきれませんでした」

媪はただ相づちを打つばかり。

「經典のみ教えの中に『捨身飼虎』というものがあります。子を養う飢えた母虎に、仏陀の前生がその肉体を餌として投じるといふみ教えです。その利他行こそが菩提薩ぼだいみやくたの行道とされています。ですが、骨と皮ばかりの人間が身を捨てても、虎の餌には足りずまい。与えるのには与えるべき何ものかを持たねば、他を利用することにもならぬ道理です。ただ空しく捨てるばかりの修行は、我欲の満足をのみもたらずにすぎぬではありませんまいか。修行者の群れからものはぐれでて、わたしはあてもなくさまよう身となりました」

男の暗いまなざしがゆるんで、月の光を見上げる様子だった。

「この地に流れてきて、焼け落ちた村落を見、荒れた畑を見、地に倒れ伏した野ざらしの屍を見たときに、わたしは自分の悟りを求め

る前に、人としてなすべきことが、今日の前にあるのだとわかりました。おそらく青蓮華人でありましょう。野に打ち捨てられた屍を、一体一体抱き起して洗い清め、土に埋めて卒塔婆を手向け、ひたすらに祈ることが、わたしの仕事となりました。一年ばかりもかかりましたでしょうか。このごろやっと、このあたりの人々を葬りおえることができたようです」

男の顔には内側から静かな光がさしているようだった。またしばらく、竹の鳴る音が続いた。

「これはとんだ若気の恥をお聞かせしました。よろしければ、そちらさまも、いずこへ行かれる旅がお聞かせくださいませんか。差支えがあれば、無理にとは申しません。が、しかし、見知らぬ人に話すことで楽になる、ということもございませよ」

男はにっこり媼に問いかけた。媼はしばらくためらっていたが、重い口を開いた。

「われらは、玄象の国のもののでござります。ひとり息子の願いをかなえに、青蓮華国の都までまいりますので」

「玄象は戦勝国ではありませんが、女性の身でひとり旅をなさるのは、いささか危険ではございせんか」

媼はゆるく首を振った。

「いえもう、われらにはこの願いのほかには何も残ってはおりませんで、よろしいのです」

「仔細あるご様子。まだ夜明けには間があります。お話しになつてください」

男の促しに媼はかすかにうなずいて、ぼつりぼつりと話し始めた。「青蓮華の都、華嚴府と申しますやら、その北の門の近くに梅里という村がございましょうか」

「北門といえば、文殊門ですね。ああ、あの凄絶な攻防のあった門。たしか梅里という村はありましたな」

「その梅里のうちのとある家に、息子の伝言を届けにゆくのでございませぬ。井戸の傍らにみごとな楊柳の木がある家だそうで」

「息子さんがご自分で来られぬわけがあるのですね」

媪はうなずくと、その日焼けした頬に涙がたつた。

「玄象国は山国で、貧しい国でございます。われらの住まいはなかでもひとときわ北のかた、桑山と申すところで。五年ほど前の山崩れでつれあいを亡くしまして、ひとり息子の狗彦いぬひこが一人前になることばかりを頼みに、暮らしておりました」

「お国は寒い土地柄なのでしょうな」

「はい、畑地も少なく、しかも山畑で穀物は取れにくい。冬は一面の雪でございます。山の者はみな獣を狩り、木を伐りして暮らしておりますので」

媪は続けた。

「にわかには戦の触れがまいりまして、狗彦はお国のため兵となつて出征して行きました。この戦は初めから勝ちと決まっている。決して戦死などするようなことはない。と、触れ役のお役人さまがおつしやるもんで、泣く泣く出したんでござります。なにせ、狗彦は体は大きくともおとなしい子で、とんと争いごとなぞできぬ子でござりましたので」

「そうですか。玄象では最初から勝ち戦と」

「戦は勝ちと知らせがまいりました。いっしょに出征した村の男衆もぼつぼつと戻つてまいるのに、狗彦はなかなか帰つて来ません。もしや万一にも怪我でもしたか、まさか討死にでもあるまいと、毎日山神さまにお灯明をあげて祈つておりました。半年もたったころ、息子はやつと戻つてまいりました。髪はぼうぼう、ぼろぼろの着物を着て、やせこけた息子は片足なくして帰つて来たんでございます」

男はなくさめ顔で大きくうなずいた。媪はためいきをつく袖で頬をぬぐつた。

「おとなしくて気持ちの優しい子でしたのに、息子はすっかり人が変わつてしまつておりました。片足では山の仕事はできません。山畑に水を上げるのも、木を伐つておろすこともできません。それでも、生きて戻つてくれただけで、われらにはよかつたのでございま

した。なに、息子とふたりぐらい、山繭蛾の糸をとって紡げば何とでも食べてゆかれます。あとは嫁をもらうて孫の顔を見せてくれれば、十分な幸せなので。お国のためになくした足だで、嫁は来手がないわけでもなかったです。でも、狗彦はうんとは言いません。荒れずさんだ目をして、山の向こうをにらめてばかりおりました」

媪は言葉を継いだ。合間に竹の鳴る音が聞こえた。

「戦場でなんぞあつたんだらう。足をなくしたことを悔やんでいるのだらうと、われらは何も聞かんだです。夜ふと目がさめると、隣で息子が泣いている声が何度もしました。時がたてば気持ちも落ち着くだらうと、われらはただ待つておりました。ですが、息子にはその時間がありません。なくした足の手当が悪かったのか、傷口が固まらずだんだん腐れてまいったので。息子は寝たきりになりました」

媪は着物の胸元を両手でぎゅっと握った。そこに痛みのもとがあるかのようだった。男は黙って耳をかたむけた。

「とうとうこの春、われらにも狗彦がまもなく山神さまのもとに召されるのがわかりました。あれほど荒れた色をしていた息子の目が、昔のように静かになつてきたからでございます。『おつかさま、堪忍してくれる』狗彦がぼつりと申しました。『嫁をもらつて孫の顔見せよと言つたなあ。俺にはできなかつた。足がこんなでなくても、できん訳があつたんじゃ』息子はとうとう話してくれる気になつたんでございます」

媪は顔をあげて男と目をあわせた。

「他国の方もよくご存じのことでしょう。文殊門の戦は騙し討ち。玄象国にとっては青蓮華は先のお后さまのご実家。もとより味方するはずの遠征が、火竜国の甘言に誑かされての寝返り。文殊門の前に布陣するまで隠密であつたそうにございます。われらが王さまのことを悪しく申したくはありませんが、あとになつて聞けば聞くほど、寝覚めの悪い戦でございました」

媪は一気に言葉を続けた。その声は苦々しく響いた。

「息子は命じられて、ほかの何人かと、その文殊門の近くの村に食糧を集めに参ったそう。それがその梅里という村です。明ければ総攻撃という前の夜、村に押し入り村の衆を縄目にかけて、食糧の隠し所を責め問うたそうでございます。井戸に楊柳のある家に押し入ると誰もおらず、息子は水を飲もうとして井戸の釣瓶に手をかけました。井戸の中には若い娘が綱にすがって隠れていたのでもうございました。娘は必至のまなざしで息子に訴えたそうです。でも、息子が思わず声を上げたためその娘は見つかってしまったのです。『俺は人でなしになってしまった。俺はもう人なみの幸せなんぞ望んではならんのだ。おつかさまの子として、顔向けできぬ男になつてしまった』息子はそう申しました」

男は話の流れがおぼろげに見えて、痛ましげに媪をながめた。

「女のわれらにはわからぬことながら、戦場という所には魔物が棲むと申しますやら。狗彦は仲間といっしょに、その娘を手籠めにしてしまったと申すのです。息子の足は文殊門の戦でなくしたそうでございますが、心はその前に失ってしまったんでございます。そのあとその娘がどうなったのか、狗彦にはわからないそうでございます。息子はそれだけ話すのにまるひと晩かかりました。『俺は詫びをせねばならぬ。それができんと山神さまの元には上がれぬ。死んだおとつさまにどの面さげて会われよう』息子はやせた手で頭を胸をかきむしって泣きました。その娘さんには悪いが、われらは狗彦が哀れじゃった。これほど苦しんだもの、もうよいと思つたのでもうございます。ですが、狗彦は首を振りました。『おつかさま、すまない。すまないが、俺のかわりにあの娘に詫びてくれ』そう申すのでもうございます。われらが承知すると、息子はやっと安堵の色を浮かべ、安らかな顔になりました。それからもう、先に逝くのを許してくれるというばかり。『よしよし。もう何も気にかげずとも、おつかがちゃんとしてやるよ。狗彦はよい子じゃったで。おつかもおっとも自慢の子じゃったでなあ』そう言ってやりました。息子は遊び疲れた子どものように、静かに眠るように息をひきとりました」

「それはよいことを言っておあげなされた」

男がうなずくと、媼は懐より古い守袋を取り出した。

「山には墓を掘る土地もありませんで、人が死ねばみな焼いて、骨灰は山に撒いてしまえます。ただひと握り、狗彦も詫びたかろうとここに持ってまいりました」

胸につかえていたものをすっかり吐き出して、媼は安らかな眠りについた。目がさめると、男は朝餉の支度をすませていた。

つつましい朝餉を取ってから、媼は庵の中を掃除した。せめてもこの礼の気持ちだった。もつとも、簡素な庵では掃除もすぐに終わってしまった。

「何から何まで、たいそうお世話になりました」

「わたしこそ、久しぶりに人と話ができて、楽しくございましたよ。この道をまつすぐたどれば、二日ほどで文殊門が見えてまいります。梅里はすぐその門外の村ですよ。道中堅固でお過ごしください」

媼は深々と頭をさげた。

「ご出家さま、どうかお名前を」

「世捨て人にはもう名もありませんが、昔は竜樹と申しましたなあ」
男はそう言くと、にっこりと笑った。その笑顔にはすでに、何ものにもとらわれない無碍の境地が見て取れた。媼は黙って合掌した。

二日歩いて、文殊門が見えた頃、媼は梅里にたどりついた。このあたりには戦の痕跡こそ残ってはいても、すでに人々も戻ってきており、日常の暮らしが営まれていた。畑を耕すもの、荷車を牽くもの。里の家々も無人のようではなかった。ここまで来て、媼はためらっていた。息子のいまわの際の願いによって、無我夢中でここまで来たものの、いざ実際に対面するとなると、相手の娘に何と申し出ればよいものか。戦での悪夢のようなできごと。若い娘の身では思い出すも忌まわしい記憶であろう。それを「詫び」という形で無理に思いださせることになるのだから。媼はゆるゆると頭をふった。

ともかく、件の楊柳の井戸の家を探すことにして、梅里の中に入っていた。

村の奥まったところに、その家はある。息子の話のとおり、見事な楊柳が井戸の上に涼しげな陰を投げかけている。風にそよぐ枝葉はさらさらと優しくなっている。媼はそのかたわらにためらいながら立っていた。家の入口から、洗い桶をかかえた若い娘が出てきた。娘は媼に気づくと声をかけた。

「旅のお方、なにかご用？あれ、水がほしいんですか？どうぞ、くんであげましょう」

娘は桶を置くと、釣瓶に手をかけて水をくみあげた。井戸端においた椀にくみだての水を注いで媼に手渡した。媼はだまって頭をさげ、その水を飲んだ。よく冷えた甘い水だった。

「ごちそうさまでした。たいそうおいしいお水で」

「はい、うちの井戸の水はおいしいと、よく言われますよ」

娘はにっこり微笑んだ。

「旅のお方、都へおいでですか。もう日が暮れます。門は日暮れには閉まってしまふんです。よかつたら、今晚はうちに泊まりませんか。明日の朝門が開いてから、都に入るといいですよ」

「見ず知らずの者にそんな情をかけられては」

「なんの、うちには困るようなものもありません。難儀は相身互い。どうか遠慮しないでくださいな」

「ありがとうございます」

娘は媼をつれて家に入った。小さいが気持ちのよい家だと媼は思った。玄象の山の家とはかなり異なっている。娘はすすぎの水を井戸から汲んできて、媼の足を洗った。

「もったいない。自分でいたしますで」

「気にしないで。お疲れでしょう。今すぐご飯の支度をしますから、少し待ってくださいね」

媼はしゃがみこんで足を拭く娘を見下ろした。この娘なのだろうか。だが、その少しも鬩りのない顔に、媼はとまどっていた。狗彦

の、あの荒れずさんだ目とはまったく違う。では、この娘ではないのだろうか。その時、奥の部屋から幼い子どもが目をこすりこすり、歩み出てきた。

「おつきしたの？ごめんね、いまご飯にするからね」

娘は桶を片づけるために立ち上がった。幼子は上り框に腰かけた見知らぬ媼を不思議そうに見た。人見知りをするかと思ひ、媼はじつと動かなかつた。幼子は眠たげな顔で媼のそばに歩み寄ると、膝にもたれかかつてあくびをした。

「あ、これ、いけませんってば。お客さまよ」

媼は膝にかかった幼子のぬくもりに、思わず頬をゆるめ頭をなでた。誕生すぎか、まだ二歳にはなるまい。乳の香の残るこの子どもは、娘の子であろうか。この若さで母親とは、と考えて、媼ははつと胸を突かれた。

「あんたさまの赤ちゃんで？」

「ええ、あたしの。そして青蓮華の姫宮さまのもあるの」

「だっこしてもよいですか。われらはこの春に息子を亡くしたもので。とうとう孫を抱くこともできませんんだ」

「どうぞ、抱いてやってくださいな。息子さんはお気の毒なことでした」

媼は幼子を膝に抱きあげて、そつと懐に抱きしめた。温かいやわらかい小さな命。幼子はうっとり指を吸いながらおとなしく抱かれていた。

「すみません、甘ったれで。あたしがあまりかまってやれないから」

「おつれあいは？」

娘は寂しげな色をうかべてかぶりをふった。そのまま台所に入つて食事の支度をする様子に、媼は幼子を抱いて見入っていた。そのうちに穀物の炊ける甘く香ばしいにおいがただよいだした。娘は手際よく支度を整えた。誘われるまま媼は板の間の卓についた。卓の上には根菜の炊き合わせに川魚の焼きものが並び、具だくさんの汁椀もついた。炊き立ての雑穀米は粟や黍よりも米が多かつた。質素

ながら心のこもった温かい食事。媼の暮らしていた山の生活よりもずっと豊かな食事だった。平原の国である青蓮華は小さくとも豊かな実りに恵まれているようだった。

「ごちそうさまでした。おかげで助かりました」

「いいえ、お粗末さまでした。うちはあたしとこの子の二人きりだから、遠慮なんてしないでくださいね」

「よいお子ですじゃ。お名前は？」

「蘭。名前といっしょに、この子の命も、青蓮華の姫宮さまに頂いたんです。だから、産んだのはあたしだけど、この子は姫宮さまの預かりもの。まあ、すっかり小母さんに甘えてしまつて」

「なんの、かえつてうれしいで。かわゆいのう」

幼子は食事をすますといつの間にか媼の膝で寝入っていた。娘は子どもを抱き上げると、奥の部屋に連れて行つて寝かしつけた。それからもどつてきて、卓上の食器をかたづけると、茶を二人分淹れしてきた。

「このあたりの方ではないですね。都は初めて？」

「われらは山家の住まいで、とんと田舎のものです。都へは知り人を訪ねてまいつたので」

「華嚴府はたいそう広いのですけど、その人の住まいはわかつてますか」

娘は薬草茶の椀を手で包みながら尋ねてきた。

「先の戦で、町並みも住んでいた人もめちゃくちゃになつてしまつてね。このごろは随分と落ち着いてきましたけど、ひところは人探しの人が大変困つたそうですよ。お役所へ行つてもお役人はよその者が多いから、前のことは全然わからなくなつていて。訪ね先がはつきりしないなら、いつそ王宮で聞いてもらつてあげましょうか」

「あんたさまは王宮に知り合いがおりなさるんで？」

媼は驚いて思わず大声を出した。娘は苦笑して手を振つた。

「あたしは別に王宮とは関係ないけど、青蓮華の子たちの世話をしてくれる係の女官さまを知つてるの。仙歌さまっていうんです。そ

の人から人別の係の人に聞いてもらってあげる」

娘は囲炉裏の脇に媪の布団を敷いた。古びてはいるがきちんと繕われ、日に干されて、ふつくらと温かい綿入れの布団だった。媪はここでも青蓮華の豊かさを思い知った。貧しい玄象国では、王侯貴族だけが綿入れの布団に眠ることができるのである。

「このごろ急に夜寒くなったから、亡くなったあたしのかかさんの着物でよかったら、着替えてくださいな」

娘の出してきたのは、合いの長着に裏付きの袖無しだった。これも古くはあってもきちんと手入れがされている。まるで村長の家の御隠居の着物のようだ、と媪は思った。見ず知らずの行きずりの旅人に、なぜこれほどの厚意をみせるのか。青蓮華人はみな心も豊かなのであろうか。あるいは、この娘が特別な気立てなのかもしれない。もし、この娘が狗彦の嫁で、あの子どもが孫だったなら、貧しくとも親子四人、さぞかし楽しく暮らせたことだろう。媪はふと空しい夢を描いた。媪は先ほどの幼子の顔立ちに、息子の面差しを必死で探している自分に気が付いた。目はどうか。口元は。媪は深い溜息をついた。

「小母さん、眠れませんか。旅の疲れが出たんじゃないですか。腰をさすってあげましょう。かかさんによくさすってあげたから上手ですよ」

奥の部屋から娘が声をかけた。

「息子さんが亡くなって、気をお落としでしょうけれど、生きていればまたよいこともありましょう。訪ね人が見つからなかったら、またうちに来てください。都の宿は高いですからね」

娘は媪の足腰をさすりながら言った。

「あなたさまのあのお子は、もしやその」

「はい。戦にはつきものの父なし子。戦の時この村を襲った兵に乱暴されてしまって。蘭がおなかにいるとわかった時、あたしは死のうと思つた。両親はもういなかったし、兄さんも戦で死んで、あたしはひとりぼっちだった。でも、姫宮さまから呼び出されて王宮に

行きました」

「姫宮さまとは、青蓮華の王族のお方？」

「ええ。何人もあたしのような娘たちが呼ばれていてね。みな苦しんでいた。でも姫宮さまは、この戦でたくさん青蓮華人が亡くなつてしまった。もうひとりも死なせたくない。青蓮華の女の産む子どもは、みな青蓮華人である。たとえ父親がわからなくとも、敵であろうとも、戦で親を亡くした子、戦で無体に宿った子、その子どもらに何の罪がある。子どもらはみな同じく青蓮華の子、姫宮さまのお子を預かったと思つて産んでほしい。産んでなお憎いと思つて持ちが消えぬなら、王宮に捨て子にせよとおつしやつたの」

「それはまた、なんとも心の広い方じゃ」

「そうよ。あたしもそのお頼みだから、産むだけは産もうと思つても生まれた赤子の顔を見たら、もう手放せなくなりました。子どもを産んだ娘は、ちゃんと王宮から手伝いの方が来てくれたの。みな安心して産めたんです。あたしの名が紫苑だからと、子どもには蘭とつけてくださった。村の人もみな、蘭は姫宮さまから預かった青蓮華の子だと知つていて、優しくしてくれる。たつきのために、王宮から機織りのお仕事もいただいてくるんです。その世話をしてくださるのが女官の仙歌さま」

「さぞ、その兵を憎んでおいでのことだろう」

「あときは確かにそうだったけど、今はどうかしら。男は獣になるのだとわかつたから、もうこりこりだけ。蘭を育てるのに精いつぱいで、思い出すこともなくなつたかも」

娘の苦笑する声が聞こえた。媪は衾の上に起き直ると、娘に向き合つて膝をそろえた。枕元の手荷物の中から、守袋を取り出し、膝の前においた。娘は改まった様子の媪をいぶかしげに見つめた。媪は両手をついて深々と頭を下げた。

「まあ、突然なにを」

「われらは玄象国の人間です。この村にご迷惑をかけた軍は玄象のもの。あんたさまに重い罪を犯した者どもです。この程度のことです、

今さらお気がすむとは思いませんが、せめてわれらを打ち罵ってください。足蹴になりとしてください」

「小母さん、あたしはなにも小母さんを責めようなんて思いませんよ。いくら玄象の人だとて」

「それが、それが、そうしていただかねばならん訳がありますので、娘は媪を抱き起こそうとして手を肩にかけた。媪はその手を取って額に押し当てた。

「われらの息子が、あんたさまに、乱暴を……」

娘は驚愕の表情でその手を引き抜いた。媪はいつそう小さく体を縮めた。

「息子は戦がもとの怪我で先日亡くなりました。最後まであんたさまに詫びたいと願っておりました。おのれではもうできないとわかると、われらに代わりに詫びてくれると言いました。罪を償いませず、身勝手なと思うでしょうが、息子はこの通り骨灰となつてしまいましたで、どうか、息子の詫びを納めてください。われらが代わりに罪を償わせてください」

娘は両手で口を押えた。媪は床に頭をすりつけたまま、ぼろぼろ涙を流した。しばらく時がたった。

「手をあげて、玄象のお方」

娘は静かに声をかけた。

「あたしはもう忘れしました。その事は酷いけれど、蘭を授かったことは逆にありがたいと思うようになりました。小母さん、子どもってそういうものじゃないですか。小母さんにとって、大切な息子さんだったんでしょう。戦には酷いことが多い。でも、そのひとつをあとで謝りに来るなんて話は聞いたこともありません。息子さんは本当は心の優しい人だったんですよ。そして小母さんも」

媪は顔をあげて娘を見つめた。

「息子が亡くなって、われらもひとりきりになりました。もうこの思いひとつかなえば、あとは野垂れ死にしようとかまわんと思っております。息子の罪の償いになるなら、責め殺されても本望と

思ってきました」

媪は目を奥の間の方にむけた。そこには幼子が眠っているはずだ。「それが、蘭ちゃんの顔を見たら欲が出てきてしまうたので。万一、蘭ちゃんが息子の胤であつたらと思うと、どうしてもそばにいたいと思う気持ちが出てきました。あんたさまには不愉快な、目障りな老婆ではありませうが、この村に置いてはもらえないでしょうか。山の者じゃで、足腰は丈夫です。野良仕事も力仕事もできますで」

娘は思いつめた顔の媪をながめ、ふつと溜息をついた。

「小母さん、相手は何人もいたんですよ。顔も見た覚えもない。息子さんがその中にいたとして、蘭の父親とはとても」

「われらは山に帰ってももう何も無い。誰もおらぬ。あんたさまは、生きていればよいこともある、と言つてくだされた。われらには蘭ちゃんがその生きるあてじゃ。どうかわれらをここに置いてくだされ」

「息子さんの名前は？」

「狗彦と申しました」

娘は静かに立ち上がると、奥の部屋から幼子を抱いて戻ってきた。抱かれてもぐつすり眠ったままの幼子を媪の腕に手渡した。媪は無言で幼子を抱きしめた。娘は幼子の顔を覗き込むと、媪に聞かせるように話しかけた。

「蘭や、よかつたね。蘭におばさまが来てくださつたよ。蘭のととさまは狗彦という名前だと教えにきてくださつたよ」

媪は胸をつかれて娘の顔を見上げた。

「ではここにいてもよいと」

娘はにっこりほほえんで軽く頭をさげた。

「ふつつか者でございますが、嫁にしてください。親子孫三人で仲良く暮らしましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9274v/>

天人散華

2011年8月21日03時32分発行